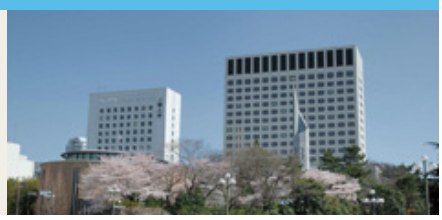
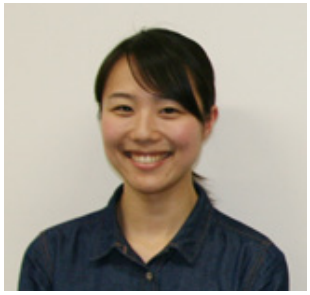
TEI 鼎 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本

上智大学 総合人間科学部 社会福祉学科

ヒューマンケアに関する研究と教育が展開されている総合人間科学部は5つの学科で構成。社会福祉学科では、幅広い知識や教養を持ち、地域社会や福祉の現場で、また一般企業、行政、NPOなどの機関で指導的な役割を果たせる人材を養成します。





■大学生
大圖ゆき恵さん

■先生
大塚晃先生

■卒業生
渡辺智興さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

先生はどのようなことをご専門に研究されているのですか？

■先生
私がメインとしているテーマは、障がい者の福祉に関する研究です。以前は、障がいのある方は施設で生活をすることが安心だという考えから、いわゆるコロニーと呼ばれる福祉施設で生活することが多かったのですね。しかし、時代の流れとともに、現代では施設ではなく、地域の人々とともに、地域で生活を送ることへのニーズが高まってきたのです。こうした状況を踏まえ、いかにすれば障がいのある方が地域で安心して暮らしていけるか、そのためにはどんな支援をすればよいか、支援のためのシステムづくりの研究を行っています。特に、知的障がいや発達障がいの方を中心にした、地域での安定した生

活についてのシステムづくりです。
支援のためのサービスを考えることも大切ですが、それと同時に、障がい者の方がおかれている環境を考えて、一人ひとりにあった生活ができるようにマネジメントする相談支援という体制があるのですが、その体制の向上のための研究、そして具体的に生活をアレンジしていく相談支援専門員の育成が重要だと考えています。多くの学生が福祉の現場で活躍してくれるように、社会福祉学科での学びを通してその素晴らしさを伝えていくことも私の仕事です。

社会福祉学科の特徴について教えてください。

■先生
社会福祉学科が設置されている総合人間科学部の前身は文学部です。その中でヒューマンケアの分野、つまり人間にかかわることを学ぶ学科が集まってできたのが総合人間科学部です。３年前には看護学科も開設され、現在、社会福祉学科、教育学科、心理学科、社会学科の５学科で構成されています。Men and Women for Others,With Others.「他者のために、他者とともに」というのが上智大学の教育の根底にある考え方で、人に優しく、人の尊厳を守る人を育てることを教育の基本理念としています。
また、社会福祉学科の特徴でいえば、実習を重視していることがあげられますね。「実習の上智」と言われるほどなのです。１・２年の授業でしっかり基礎を学び、その後３・４年で、福祉の現場でいろいろな経験をすることで問題意識を高める。理論と実践を両輪にした教育が大きな特徴といえるでしょう。もちろん、社会福祉士国家資格取得のための勉強をすることもできますが、決して資格取得を目指すわけではありません。学問としての社会福祉を学び、学んだことを、福祉に限らずいかなる分野に就職しても活かしていく。そんな教養教育を通して人を育てていく学科です。

渡辺さんは現在、どのようなお仕事をされているのですか？

■卒業生
行政（公務員）の社会福祉専門職として、発達障害者支援センターで勤務をしています。障がいのある方やご家族がどのように地域で生活していきたいのかを伺い、一人ひとりのニーズに応じた問題解決や生活上の工夫を一緒に考えていくことが主な役割です。また、一人ひとりの問題解決だけではなく、当事者の声や思いとともに、関係者の声にも耳を傾けながら、個別のニーズや問題から地域のニーズや課題として抽出をし、当事者の方々が地域で安心して暮らすためのシステムづくりをしていくことも行政の社会福祉専門職の大きな役割です。システムづくりには当事者の権利や人権、社会経済状況などさまざまな側面から分析をし、実践と理論に基づいて書面にしていくこと、そして、そのシステムの必要性を関係者に理解してもらい、政策として結びつけていていくことが求められます。地域に必要なものをプラスアルファし、地域に根ざした制度やシステムづくりを行う。ここに行政の社会福祉専門職の存在意義があるのだと考えています。

大圖**さんはオーストラリアで生活されていたんですね。**

■大学生

はい。私は中学２年から高校卒業までの５年間をオーストラリアのシドニーで過ごしました。高校卒業後の進学については、勉強をしながら受験シーズンのギリギリまで悩んでいました。最終的には、５年も離れた母国がどうなっているかを知りたいという思いから、日本の大学に進学することを決めました。日本では高校を卒業するとすぐに大学進学となりますが、オーストラリアや欧米では「ギャップイヤー」といって、高校卒業から大学入学までに一定の期間を設けて、アルバイトをしたり旅行へ行ったり、さまざまな経験をした上で進学を決めるという人も少なくありません。

●大学生活について

お二人が上智大学に入学されたきっかけは何ですか？

■大学生

父が同大学の出身で、親近感があったことが大きいですね。オーストラリアからの帰国子女で、どうして社会福祉学科を選択したのかって聞かれることがありますが、私の関心は、英語を使って何かを成し遂げるというよりも、海外から客観的に母国を見ることのできた経験を生かして、日本で起こるさまざまな問題について考えてみたいというところにありました。当初は社会学を専攻しようとも思いましたが、社会福祉の方が実践的な気がして、アクティブな私にはピッタリだと感じました。そして、大学で実際に社会福祉を学んでみて、先ほど先生がおっしゃっていた“理論と実践の両輪”はその通りだと実感しました。２年生までは座学で理論を学ぶことが中心で、現場のイメージはなかなか湧きにくかったですが、３・４年生で実習に行き、前半の２年間で積み上げてきたものが、「こういうことだったのか！」と、理解が深まる感覚は大いにありましたね。

■卒業生

私の場合は、身近に障害のある方がいたことが、社会福祉を学びたいと思ったきっかけでした。しかし当時（平成５年頃）は、社会福祉学科がある大学は日本でも数えるくらいしかありませんでした。上智大学に社会福祉学科があることも知っていましたが、私の場合、どちらかといえば理数系の科目のほうが得意だったこともあり、最初は国公立大学への受験準備をしていました。
高校３年時の２学期に、学校で上智大学の推薦枠があることを知りました。今は分かりませんが、当時はどの学部を志望してもいいというものでしたので、手をあげてみたところ、上智大学を志望する男子学生は私一人でした。そんなわけで、最初は無理だと思っていた上智大学へ入学することができました（笑）。

印象に残っている授業は？

■大学生

さすが「実習の上智」と言われるだけあって、実習ですね。実習は通常 30 日間ですが、希望すれば追加で行うこともできます。私は、3 つの施設・事業所でトータル 60 日間の実習を行いました。最初の実習は障がいのある方の入所施設でした。視覚障がいや知的障がいなどを併せもった方たちの施設に 30 日間、その後は知的障がいのある方の入所施設に 15 日間行きました。そして最後は、地域で障がいのある方を支援する事業所で 15 日間実習を行いました。実際に福祉の現場を体験して、「現場がどんな仕組みで動いているのか」、「障がいのある方が地域で生活していくには、どんなシステムづくりが必要なのか」など、現場のシステムや組織のあり様を俯瞰して見ることができました。実習においてこうした視点で学ぶことができたのも、大学での事前の学びがあったからこそだと思っています。また、「実習スーパービジョン」という科目がとても好きでした。先生と学生 2 名という少人数で、実習の振り返りをするものでした。実習の際に現場で発見した課題について考えていくのですが、こういう視点からみると、こういうことがいえるなど、さまざまな角度から理論的に分析していくので、実習での学びを更に深めることができました。

■卒業生

私が大学で学んでいたときは、社会福祉は措置という制度であり、利用者の意向が尊重される制度ではありませんでしたが、国では介護保険制度導入の検討がされ、利用契約制度の導入が図られるといった社会福祉の大きな変革の時期でした。授業では、利用者の意思や思いを実践者としてどうくみ取るか、障がい者や高齢者の方が暮らしやすくなるためにはどうしたらいいのかなど、利用者の視点でものごとを考えていくことを学びました。

●就職活動、仕事について

■大学生

一般企業に就職した人よりは、だいぶ遅いスタートでした。先生からさまざまな話をお聞きしましたし、情報もたくさんいただきました。最終的には法人の理念をみて、自分の中にある「どんな障がい福祉をつくっていきたいのか」という思いを鑑み、そのイメージにあったところに決めました。福祉の現場で働くことに関しては、それが自分に合った選択肢なのか、しばらく悩んでいた時期もありましたが、実習を経験したことで、福祉現場へ就職したいという思いが強くなり、現場就職を決めました。

■卒業生

進路は、国家公務員の仕事を選びました。福祉現場の仕事ではなく、行政に進んだのは在学時のゼミでの学びの影響もあったのですが、卒業後すぐに福祉の現場に行ったところで自分はどんな役に立つことができるのか？という疑問がわきました。障がい福祉に関わる仕事はしたいと思ってはいましたが、現場に行くのであれば、もっと広い視野が必要なのではないかと感じたのです。大学で学んだからこそ、よけいにその思いが強かったんだと思います。そこで、国家公務員の立場で、世の中の制度がどう作られているのかを学び、視野をもっと広げようと考えました。でもそれを決めたのは 3 年生の半ば。少し遅かった！ それ以降は、公務員試験突破のために大学以外のところでも、必死になって勉強しました（笑）。

国家公務員として6年勤務しました。だんだん担う業務も大きくなってくるなか、福祉の現場がどうなっているのかがわからずに、仕事をせざるを得ない状況になってきたのです。今こそ現場を見て、そこで何が必要なのかを考えていかなければならないと感じ、転職を決意しました。福祉の現場に行って思ったことは、当事者の方と1対1の個別の関係をどのように上手く築いていくかというミクロ的な部分と、社会福祉の政策や制度というマクロ的な部分の両方の視点から支援をしていくことが重要であると感じました。幸いに国で仕事をしていましたので、制度の説明や情報を提供する際に、この制度がどういう目的であるのかというマクロ的な部分を当事者の方に丁寧にお伝えすることができ、そのことで当事者の方から信頼していただくこともできました。

先生は大学や大学院で哲学をご専門に研究されていたようですが？

■先生
もう40年も前のことです。先ほども言ったように、その時代は障がい者の方は福祉施設の中で生活することが安心という考えから、そのニーズも高く、施設での生活がメインだったのですね。私は大学・大学院と哲学を勉強したものの、就職先がない（笑）。たまたま自宅近くにあった障がい者の方のための大きな住居施設にご縁があり、そこで21年間、食事や入浴、散歩、野菜づくりなどの直接ケアを経験しました。
仕事を始めると面白くて…、気が付けば21年もの歳月が過ぎていました（笑）。仕事をしながら大学院で哲学に関する研究を続けていたのですが、施設で仕事をするようになってから、あれほど憧れていた哲学から関心は人と関わる、世の中のシステムを変える、というようなもっと実践的なものに移っていったのです。
そんなとき厚生省からお話をいただき、課長職・専門官という立場で児童や障がい者に関わる仕事を10年以上してきました。厚生省時代には、渡辺君と一緒に仕事をしたこともありましたね。

■卒業生
障害者自立支援法という、今までにない大きな法律の改正があった時期でしたね。

■先生
そう、法令の係でさまざまな法律を作るという一番大変なポジションで渡辺君が仕事をしていて、私には、大変な仕事を一緒にしたという仲間意識のようなものがあります。そのあと渡辺君は役人のポストを捨て、福祉の現場で制度を考えたり、システムづくりに取り組む一方で、大学院でこれまでやってきたことを理論的にまとめていった。大学院では私も指導しましたがとても素晴らしいことですね。

■卒業生
私が大学院に入ったのは2011年で、当時は障がいのある方の相談支援を担当していました。相談支援の仕事では、医師や学校教諭、リハビリスタッフなどさまざまな専門職が集まって、障害のある方への支援を検討する機会が度々あるのですが、そのときに、他の専門職の方々はそれぞれが専門性をもってお話をされているのに対し、私は、相談支援の専門職として、自分の専門性を言葉にして、他の専門職に伝えていくことが難しかったのです。そこで、もう一度自分自身の仕事、専門性は何かを見つめ、周囲に伝えることができるようになろうと考えたのです。

● 5 年後に向けて

今後の目標を教えてください。

■先生

今と同じように、５年後も社会福祉という学問を通して身に付けた教養を活かし、いかなる分野に就職しても活躍できるような学生を育て続けていきたいですね。そして、障がい者福祉の研究を専門とする私としては、社会を変革する可能性をもつ、素晴らしい仕事が待っている社会福祉の世界で活躍できる人材を、一人でも多く育てていたいです。

■卒業生

うつむき加減に相談にこられた方や、これまでいろいろ相談したけれどうまくいかなかったという方が私たちと話をすることで、少しでも解決の糸口が見えたり、相談してよかったと感じていただける、そのような場に立ち会え、共有できることが、この仕事のやりがいだと感じています。相談に来られた方自身がそのちょっとした変化に気づいてもらうことは、私たち職員にとっても嬉しいことなのです。ちょっとした変化といっても、それには時間がかかることもあります。しかし、こうした地道なことをあきらめずに続けていくことが福祉の仕事ですし、それがやがてはご本人なりの問題解決や成長へとつながっていくものだと思います。相談される方の人生に少しでも寄り添えることが出来る、このことが福祉の仕事の醍醐味だと思います。

また、先ほどからでている実習の話について言えば、私は現在、７～８名の学生の実習を引き受けています。職場の後輩や実習生にも自分たちがやってきたことをきっちり伝え、私だからできるのではなく、他の人にもできるという環境づくりや人材育成にも力を入れていきたいです。

そして、障がいのある方への支援ではインクルージョンという考え方があります。私は、障がいのある方の立場から、このインクルージョンについて考え、仕事をしていきたいですね。

■大学生

社会福祉士の資格は取得することができたので、精神保健福祉士など他の資格にもチャレンジし、現場で働きながら専門性を高めていきたいと思います。私は、大学で社会福祉を４年間学ぶ中で、自分の中で「こういう障がい者福祉がいいんじゃないか」という、イメージもってやってきたのですが、それに固執しては視野が狭くなってしまうので、勉強は続けていきたいです。これから現場で働く上で、知識と技量をしっかりと身につけていきたいですね。今後５年間では、専門性を高めていくこと、そして、福祉現場の現状をしっかり知ることをやっていきたいです。頭でっかちにならないように…。

●高校生へのアドバイス

高校時代にやっておく大切なことを教えてください。

■大学生

私自身が高校生のころに実践していたことでいうと、本や新聞を読んで、情報収集することです。オーストラリアに住んでいても、日本の社会で、今何が起きているのかを新聞やネットでチェックしていました。本だと、新書は読みやすくていいと思います。社会の問題にに対するさまざまな考え方に触れることができます。私にとっては、自分の中で問題意識を形成していく上でとても役に立ちました。

■卒業生

一つは、憧れの人、この人すごい、そんな対象があるといいのではないでしょうか。私自身にもそんな人がいました。そして、その人に近づくためにいろいろなことにチャレンジしたものです。いろいろなことをやってみること、そして、その中でたくさんのことを経験するのが大切だと思います。

二つ目は、人に感謝する気持ちを忘れないことです。皆さんが日々当たり前だと思ってやっていることは、親御さんや学校の先生をはじめ周囲の方々があってこそできることです。私も仕事をするうえで、感謝の気持ちを相手に伝えるように心がけています。

三つ目は、１日１回、自分を褒めてください。あるいは身近な人に褒めてもらうこと。これは意外と大切なことだと思っています。

最後にこの学科のずはらしいところを教えてください。

■先生

最初にも少し触れましたが、上智大学のモットーは「他者のために、他者とともに」です。抽象的で少し分かりずらいかもしれませんね。これを社会福祉学科で考えていきましょう。

よくよく考えてみると、社会福祉って他者と関われる、そして他者と一緒の社会を作っていける可能性のある仕事だと考えています。もちろん一般企業で働くことも、他者との関わりをもちますが、すくなくとも社会福祉という場所では、それを必要とする人たちがいて、その仕事を待っている人がいるということです。

どうでしょう。そんな仕事ができることは、とても喜ばしいことではないでしょうか。そして、社会福祉の基礎を４年間しっかり勉強できるのが社会福祉学科なのです。学んだことは一般企業へ就職しても充分に活かすことができますし、決して無駄にはなりません。また、社会福祉は人に関する多くのことが学べ、なおかつリアリティのある学びだと思います。頭で考えることも、理論も大切ですが、現場で高齢者や児童、障がいのある方などと向かいあい、対人関係の様相を経験できる学科なのです。

福祉の世界は大変で人材も不足していると敬遠されているかもしれません。だからこそ、私は皆さんにリーダーとなってこの業界を変えてほしい、よりよい業界を作ってほしいのです。
そして、もう一つ。今、社会福祉の世界でもグローバル化が世界的規模で進められています。中国、東アジアをはじめ、世界各国と協定しながら、高齢化問題や少子化問題の解決に取り組み、持続可能な社会をどう作っていくのかという、根本のところを考えていかなければならない可能性のある分野です。このことも含め、ぜひ、皆さんにこの世界で頭角を現してほしいですね。お会いできる日を楽しみにしています。

●インタビューに答えてくれた方々

■先生

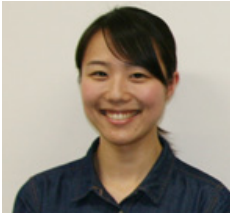
大塚晃先生

群馬県立中央高等学校出身
上智大学文学部哲学科卒業
上智大学大学院文学研究科専攻修了

■卒業生

渡辺智興さん

神奈川県立相模原高等学校出身
上智大学文学部社会福祉学科卒業
上智大学大学院総合人間科学研究科社会福祉学専攻修了
相模原市発達障害支援センター勤務



■大学生

大圖ゆき恵さん

オーストラリア連邦ローズビルカレッジ出身
上智大学総合人間科学部社会福祉学科　４年生